

開催地名	兵庫県加古川市
開催日時	令和6年1月17日（水） 14:00 ～ 15:30
開催場所	加古川市役所新館 10階大会議室
語り部	澤島 博（千葉県四街道市）
参加者	加古川市職員（管理職職員） 100名
開催経緯	当市では市内を流れる一級河川による水害について、大きな被害が想定されているが、近年、当市で大きな災害が発生しておらず、災害対応を経験していない職員が増えている。このことから、災害対応への危機感が薄れており、防災部局だけではなく、全庁をあげて災害対応に取り組むという共通認識ができていないのが現状である。そのため、実際に災害対応した方にお話しいただくことで、職員の防災意識向上に繋がると考え講師派遣を依頼した。
内容	（１）防災とはなにか 人と地域に対する愛情のことである。震災に限らず風水害も同様に平時から、災害被害に対する防災対策・意識付けを市の文化の１つとして、自分自身の身の安全を守る『自助』、地域やコミュニティといった周囲の人たちが協力して助け合う『共助』、そして市町村や消防、県や警察、自衛隊といった公的機関による救助・援助といった『公助』、この３つが滞りなく機能し連携して大切な人、地域、町の被害を最小限に食い止めることである。災害時には自助・共助・公助の連携強化が必要不可欠であり、総力戦で立ち向かうことが大切である。 （２）風水害の備え 近年、我が国では豪雨災害が激甚化・頻発化しており、また地球温暖化の影響等があるため、風水害の備えとして市は気象庁のキキクル（危険度分布）等を有効に活用し、危険分布や防災気象情報、被災に見舞われる可能性がある危険な地域にお住まいの市民、高齢者に避難や避難指示を発令することが大切である。 （３）四街道市の風水害対応 令和元年９月～１０月の２ヶ月間の期間で、台風１５号（房総半島台風）、台風１９号（東日本台風）、台風２１号による影響で、１０月２５日の大雨（総雨量２６７ミリ）により一級河川の氾濫や道路の冠水、宅地浸水含め計５４カ所で甚大な被害が発生した。この影響により千葉県すべてで暴風、大雨、洪水に見舞われ、この間は災害警戒態勢を１ヶ月以上継続した。また、台風１５号では倒木や強風で電柱が折れ、計１３４００件で停電が発生、停電が完全に復旧したのは発生から８日後である。これを自衛隊、消防、東電が連携して復旧にあたり、後に四街道モデルが完成したとされる。 令和５年９月８日から９日の２日間には、台風１３号による影響で大気の川（総雨量２４１ミリ）が発生し、人的被害は見受けられなかったが、道路冠水や河川氾濫、土砂崩れなどの被害報告は多数寄せられた。市は市長を本部長とする災害対策本部を立ち上げ対応にあたった。 （４）風水害対策における教訓と風水害被害発生前後の活動

	防災力とは、先も触れたが自助・共助・公助の総合力であると考え。具体例を挙げると、情報ツール内蔵スマホの所有や防災メールへの加入、市民自身での防災に対する日頃からの備えが自助にあたり、自治会の住民加入と避難所の運営や参画、平時は側溝等の清掃や災害時は町の被害状況の情報提供などが重要であり、これが共助である。そして、能登半島地震をわがこととして防災対策を推進し、市民への防災情報の発信や要介護者の不安に応える発信、影響力が重要であり、中でも早期の情報発信や市長自ら避難を呼びかける効果は壮大な効果をもたらす。平時においては地方気象台との信頼関係の構築を図っておくと、災害時に連携が取りやすくなるため、災害対策本部設置前の事前準備をしておくことが重要である。そのほか県警察、関係機関との連絡窓口の確認を事前にしておく公助も重要である。 (5) 災害対策本部設置後の初期対応として まず第1回災害対策本部会議を開催し、本部設置時は県や関係機関との一報 連携 リエゾンの派遣、その後の県との対応がスムーズになるため、応急対策の活動の基礎は、情報収集と情報共有をして即時の救命救急活動に生かす。 災害時は規模が大きいほど市民からの問い合わせが殺到するため、あらかじめ担当窓口を設置しておくことが重要である。基本的に本部事務局は活動全般の統括に集中する。また、支援は早期の段階で躊躇なく県などに要請し、災害発生から3日間は、優先して被害を最小限に食い止める態勢を市で作る事が大切である。支援に空振りなしである。 (6) まとめ 大規模災害において市役所は公助の中核として被害を最小限に食い止めるべきであり、早期復旧を図ること。共助と連携し災害に立ち向かい市民目線、被災者目線、現場主義を忘れず活動する事が大切である
開催地より	アンケートにもある通り、職員の防災意識の向上には十分つながった。澤島講師の災害対応の経験や自助・共助・公助の連携についての意識は管理職に響くものがあつたのではないかと感じている。研修で防災意識は危機感を持ってはいるものの、アンケートでは「研修を実施してほしい」「業務に繋がる話をしてほしい」というような感想が見られる。あくまでも受動的な考えで、防災以外の部局の意識が自らがアクションするまでには至っていないのが現状である。この機会に勇気を出して一步を踏み出せるような企画を防災部から他部局に提案し、組織全体で防災を考える雰囲気づくりをしたいと思う。